



レジェンドたちの祭典 ～千葉県社会福祉士会 二十周年記念式典開催～

うなるギター、ベースとドラムで刻むリズムが速まり、盛り上がりが頂点に達したところに入る「wind thing」の歌詞とともに神山裕也会長が登場し、『千葉県社会福祉士会 二十周年記念式典』の幕が開きました。平成二六年三月一日、今年で会の設立から二十年の節目を迎えた千葉県社会福祉士会は、歴代の会長をお呼びしてこれまで会が歩んできた道のりを振り返る機会を得ることができました。式典が始まる直前まで、懐かしい広報誌『点と線』のバックナンバー（一面だけですが…）を挟み込んだ真新しいパンフレットを手にした出席者により、そここでまるで同窓会のような談笑が繰り広げられていました。

冒頭の曲がかかり、神山現会長が登場するとそこからは歴代会長を一人ひとりお招きしての「レジェンド・トーク・バトル」。最初にお呼びしたのはもちろん、坂下光男初代会長。入場曲はアルゼンチン・タンゴの名曲『ラ・クンパルシータ』。当会が産声をあげる前夜からスタート直後の熱い想いを語ってくださいました。「この仕事に携わるには相手の身になって、本気で考えることが大事」と、会員へのエールをいただきました。

日本社会福祉士会全国大会のオープニング曲『いつでも夢を』がかかり、入場するのは落合元和二代目会長。会員の士気を一つにまとめ、さらに上のステージを目指すために一役買った全国大会開催についてお話をいただきました。ちょうど阪神淡路大震災もあり、無我夢中で対応した熱が伝わってきました。「人

の相談に乗るには自分が幸せであること」と含蓄のある言葉をいただきました。

NABOの『負けないで』を入場曲に選んだのは、宮本和武三代目会長。社会保障制度の変革期に当たる時期で、後に社会福祉士にとつての大きな一歩となる成年後見制度が始まる時期でもありました。「制度を動かしていくのは社会福祉士であるべき」「これだけの仲間がいるのだ」と支え合うことができる」と勇気の出る言葉をいただきました。

雰囲気はガラリと変わり、『河内音頭』がかかって登場したのは、三橋俊一四代目会長。会がより大きな力を出せるように、と法人化を目指すことになった経緯についてお話をいただきました。会が急激に大きくなってきた頃で、会の存在意義を明確にする必要が感じられるようになった時期でもあります。「会に

入ったメリットを自分で作り出せる会に」「会員一人ひとりが意見を出せる会を」とこれから目指すべき方針を打ち出してくださいました。



アップテンポなホーンセクションが鳴り『あまちゃん』のテーマでの入場は、林房吉五代目会長。社団法人としての会がスタートし、他の職能団体や福祉

の機関の外部理事や委員として、担う責任のあり方が変わってきた時期でした。当会も外部理事を導入し、会員を増やし、社会福祉士の地位を向上することが会として目指す方向性の一つとして確立されました。「会に専門職として育ててもらった」と会長期を振り返っていました。

「大人だろ 勇気を出せよ」と、背筋が伸びるような歌詞の『空がまた暗くなる』（スルクセシヨン）を入場曲に登場したのは、山崎泰介六代目会長。社会福祉士の使命として、少数の人、目の前の人を助けなければいけない、同時にそれは、自分の立場として安穩としたところから降りなければいけないことになるかもしれない、という葛藤に対峙した時に、その怖さに負けてはいけない、という強いメッセージをいただきました。制度としての地域包括支援セン

ターがスタートし、会としても実習指導者研修や虐待対応専門職チーム、千葉市の安心生活創造事業のモデル事業をスタートさせた時期でもあり、専門職がその専門性を発揮するためにしつかりと根拠を持ち、常にその在り方を検証すべき、とお話していただきました。

六人の会長と渡り合い、その中でも最年少でありながら、今、会を牽引している神山会長。任期中に東日本大震災が起こり、そこで会員一人ひとり何ができるかを考えながら動いた姿を見て、感銘したことをお話ししていました。また、これから起きるであろう有事に専門職としてきちんと準備しておくことの大切さも同時に語っていただきました。

式典は、最後にレジェンドからそれぞれ一言メッセージをいただき、会の設立に奮闘され、

現在のわれわれのつながりの礎を作ってくださった坂下初代会長と落合二代目会長に感謝状を贈り、盛会の内に閉会となりました。

参加者からの感想

「温故知新の旅に誘（いざな）われて」

大橋 美和

タンゴの音色に乗って軽やかに坂下光男初代会長が登場され、草創期から現在までの千葉県社会福祉士会二十年を紐解く旅が始まりました。福祉のフィールドを走り、耕し、支えてきた七名の歴代会長の語らいは、人間味に溢れた「金言」詰まった濃く熱い時間となりました。

数ある「金言」の中で、特に私の心に深く響いたのは「人間性を磨く」というキーワードで

す。私たち社会福祉士の根幹は、まずは知識や技術に頼り過ぎるのではなく困っている人の身になって必死に考えることであり、困っている人の幸せの実現のために、まずは自分が幸せであること、そして幸せとは何かを感じる感性を磨くこと、それが人間性を磨くことに繋がるのだと教えていただいたように感じています。

七名の歴代会長が振り返ってくださった「過去」の延長線上に、「今」の私たち社会福祉士一人一人がいるのだという実感を得て、心強く感じるとともに身の引き締まる思いです。

